

初期洛中洛外図屏風について(一)

山岡泰造

一九九四年秋、京都国立博物館で洛中洛外図屏風を中心とした特別展が開かれた。その際、洛中洛外図屏風の初期の遺点四点(うち一点は模本)を観察して聊か感想を得たので、それを記すものである。

一

この四点は国立歴史博物館(以下歴博とする)の甲本(旧三条家・町田家本)と乙本(旧高橋家本)、上杉本、東京国立博物館(以下東博とする)の模本であるが、これら四点について高橋康男氏の比較検討があるので、まずそれを紹介する。(『国華』一一〇五号所載「初期洛中洛外図屏風の絵画史料論的再検討」昭和六二年七月)

諸本の関係を(一)描写内容にみるオリジナリティからみると、諸本にそれぞれ固有の名所をもっており、ここから画家の制作意図の一端をうかがうことができる。歴博甲本の観世能。東博模本の法性寺・興臨院・白雲寺・観寿寺・本法寺法華堂・西院地藏堂や、公武邸宅の石橋殿・畠山殿・額田・若槻殿・仁木殿・讃州屋形・小笠原殿など、そして他の諸本にある天竜寺が描かれていない。上杉本は書き込みが多量にあり枚挙に

暇のない程固有の名所が知られるが、禅寺・時宗道場の描写に熱心で、医者の竹田法印・竹田瑞竹・上池院・兼康を描く。高橋本は禅寺の取上げ方を上杉本と比較すると、全景を描かず簡畧な姿に描くところが対照的である。

次に構図について見ると、奥行き方向の線が左上がり(順勝手)のものが歴博甲本と東博模本、右上がり(逆勝手)のものが、上杉本と歴博乙本である。前者は下京隻では南面する建物は背面から描くことになり、上京隻に描写の重点が置かれる。後者は下京隻に重点が置かれ、かつ金雲を多用し建物の一部を覆うため、順逆の勝手の意味を軽くしている。歴博の甲本・乙本と上杉本は、一条以北を上京隻に、一条以南を下京隻に配するが、東博模本は一条以北を新町によって東西に二分し、西半分を上京隻に描き、東半分を下京隻に入れる。従って上京分は八扇に互って描かれる。また下京隻に入る公方邸は東西の向きが実際とは逆になっている。

(二)細部描写の技法にみる諸本の関係。(1)歴博甲本は紙本著色・金泥霞引きで古様、他の三点は画面が金地、雲の描法が金雲で新しい技法を示す。(2)石敷・瓦敷の描写について、色を同じ濃さでベタ塗りすると、

市松模様は濃淡の差をつけるのと二つのケースがある。後者の特色を示すのは歴博乙本の百万遍・祇園社西楼門・清水寺楼門・東寺であり、他の三本にはみあたらない。上杉本の万寿寺の三門はごく淡く市松模様に描いている。(3)屋根・軒反りなどの描写が曲線か直線か。歴博乙本は直線の描写の傾向が顕著で、上杉本は屋根の形にかなりのデフォルメ(棟を高く強調して描く)があるが、歴博甲本と東博模本はゆるい反りをもった曲線で伝統的手法に近い。(4)塔(木造・石造)の描写。縁や高欄を描かず屋根と塔身のみを描く簡略図法をとるのが歴博乙本で新しい方向である。(5)等角図法が正規か歪みをもたせるか。金閣について諸本を比較してみると、歴博甲本は描写がもつとも正確であるが、等角図法を捨て稚拙な一点透視図法による。東博模本は等角図法を用いるがや、歪んでおり、二層・三層の描写もや、不正確である。上杉本は外観をより多くみせようとしたためか、不等辺四角形にした変形等角図法というべきやり方で、これは近世初期以降よく用いられている(清水寺三重塔・子安塔・八坂塔・広隆寺塔も同じ描法)。歴博乙本も上部二層を等角図法で描く(他の場面では上杉本と同種の変形等角図法がかなり数多く用いられている)。

以上の五つの指標から、歴博甲本、東博模本と上杉本、歴博乙本の三つに分類され、歴博甲本が古様で、歴博乙本は新しいタイプに属し、東博模本と上杉本が中間の位置にあるが、上杉本は新しい傾向を示す(高橋氏は光円寺本と宗秀本をも併せて考察している)。

(三)特異な景観描写にみる諸本の関係。

(1)歴博甲本と東博模本。画面の角度および順勝手・逆勝手の混用につ

いて本質的な親近関係がある。(2)歴博甲本と歴博乙本。宝鏡寺の東南隅の槽状の小建築について共通性がある。ただし同寺の他の建物については相異なる(東博模本と上杉本は同寺の他の建築を含めて酷似する)。

また神社建築、とくに流造本殿の描写は両本とも正しく描いているものと異なる形式に描くものが混在する(東博模本と上杉本はほぼ正確である)。(5)東博模本と上杉本。禅寺の黒漆塗りの柱が共通する。また大徳寺山門を共に二階二層に描いている。また万寿寺・南禅寺の描写も佛

殿・法堂を中心に本格的なものである。(6)東博模本と歴博乙本。三十三間堂の西側の縁に二ヶ所欠き込みがあり、その凹部に踏台を置いている。また祇園社西楼門を共に入母屋に描く(実際は切妻)。(7)上杉本と歴博乙本。下京隻の室町通の路上に町屋を描く。ただし上杉本は姉小路室町

歴博乙本は三条室町にあたる。また共に清水寺三重塔と子安塔の二つを描く。また内裏東辺の天満宮と四条泣地蔵も描く。また北野社社頭の忌

明塔を五輪塔ではなく特種な形式にかいているのも共通する。二条殿の描写では建物を南、庭を北におく(歴博甲本と東博模本は、建物を北、庭を南に描くが、この方が正しいであろう)。(9)歴博甲本・東博模本・

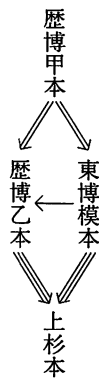
上杉本では洛中の小河川は土のま、描くが、歴博乙本ではすべて石積み

に描く。また町屋の門口に掛ける暖簾は、上記三本では内側から吊り、歴博乙本では戸口の外に掛ける。(10)東博模本・歴博乙本・上杉本では清水寺本堂の舞台の東西両翼に突出した楽屋の屋根を切妻に描く(実際は入母屋)。また三本共、子安塔(天文十七年〔一五四八〕供養)を描く。

以上の諸関連から高橋氏は次の様に結論される(ただし、高橋氏は光円寺本・宗秀本・吉川本も考察されているが、その部分は省略した)。

関連の強いものから順に並べると、(1)東博模本と上杉本、(2)歴博乙本と上杉本、(3)歴博甲本と東博模本、(4)歴博甲本と歴博乙本となり、(1)歴博甲本と上杉本の内容上の関連を強く示唆する要素が見出されなかった。

(2)歴博甲本以外の三本は一つのグループをつくり、そのグループ内では上杉本に対する関係が強固であるが、歴博乙本と東博模本の関係はそれ程でもない。歴博乙本と東博模本は内容的には歴博甲本と上杉本の間段階に位置づけられるが、歴博乙本と東博模本は同列ではない。(3)歴博甲本と歴博乙本はある側面において比較的強い親近性をもつ。(4)歴博甲本と東博模本は描写内容については関係が稀薄であるが、勝手および勝手逆転場面の共通性から強い関係をもつ。以上の結論を高橋氏は次の様に図示される。



(線の数の多いほど関係が強い)

(四)制作年代の検討。

(1)大永五年(一五二五)十二月、足利義晴の柳原御所移徙。歴博甲本の上京隻の公方邸をこの御所と考えるが、地理的にみて疑問がある。(2)天文二年(一五三三)大徳寺塔頭興臨院の創立。東博模本は大徳寺の西にこの興臨院を描く。(3)天文十一年(一五四二)足利義晴、花御所移徙。文明八年焼失後、はじめて再建された室町殿を描くのは、東博模本・歴博乙本・上杉本。(4)天文十四年(一五四五)本能寺の移転再建。天文五年焼失以前は六角以南大宮以西にあったが、六角以南・四条坊門以北・油

小路以東・西洞院以西に移る。この位置に描くのが上杉本(新寺地購入に関する文書は六月廿四日以降)。(5)天文十五年(一五四六)本法寺の移転・再建。三条万里小路から一条堀川上ル戻り橋の地に移る。この位置に「本法寺法華堂」を描くのが東博模本。(6)天文十七年(一五四八)

清水寺小安塔の建立(三重塔は焼け残り、本堂は文明十六年再建)、楼門前の子安塔を描くのは東博模本・歴博乙本・上杉本(東博模本は三重塔を雲で隠し描いていない)。(7)永祿四年(一五六二)三月、三好筑前守義興邸御成の為の新築。將軍義輝の御成路(上立売→光照院殿前→道正際木下)から、新町通に面した西晴れの邸宅で、將軍御成の為に冠木門が築地の南端に西面して建てられた。上杉本にはこの門が描かれ北方には板葺の小門が描かれている、その描写は『三好筑前守義長朝臣亭江御成之記』に収める平面図(会所・能舞台・茶室など)に一致する。(8)天正二年(一五七四)頂妙寺の移動。日珖の「己行記」によれば、永正六年、新町長者町(鷹司土御門間西類)。大永三年、中御門高倉。天文十五年(一五四六)、中御門高倉に再建。天正二年(一五七四)鷹司新町(いまの元頂妙寺町)に再建。上杉本は鷹司新町に描く。ただし上杉本の頂妙寺とその周辺の上御霊御旅所の描写とよく似た場面が、歴博甲本と歴博乙本に認められる(東博模本は下京隻五扇目が欠けていて不明だが同じ場面が描かれていたと推定する)。

以上から高橋氏の結論は諸本の上限を次の様に推定する。(1)歴博甲本、大永五年(一五二五)十二月。(2)東博模本、天文十七年(一五四八)三月。(3)歴博乙本、天正二年(一五七四)三月。(4)上杉本、天正二年三月。更に、歴博甲本と東博模本は、上京隻に重点があり公武寺社権門体制の

都市の描写に傾きがちであるのに対して、上杉本と歴博乙本は下京隻に重点をおき新たな町衆と町共同体の都市を描こうとしたとされる。上京中心から下京中心への制作意図の転換の理由の一つとして元龜四年の信長による上京焼打を考えている。

二

上杉本の制作については今谷明氏の考察がある（『京都・一五四七年——描かれた中世都市』平凡社、一九八八年三月）勿論他の三本についても関連する点が多いので、要点をまとめてみる。

(一) 武家屋敷の景観。歴博甲本には公方様・細川殿・典厩・薬師寺殿。東博模本は花ノ御所・伊勢守殿・畠山殿・仁木殿・小笠原殿・石橋殿・細川殿・右馬頭殿（義）・薬師寺備後守・額田・若槻殿。上杉本は公方様・武衛・伊勢守・畠山（義）・上臈・細川殿・典厩・知泉守護殿・薬師寺備後・三好筑前・高島甚九郎・松永弾正・西院城。以上から、歴博甲本は、將軍邸のほかは細川惣領家・同庶流家・同有力被官の各邸一つづつという単純な配置である。東博模本は幕府・細川氏関係以外に、足利氏一族の伊勢氏（幕府政所執事）・畠山氏（河内・紀伊・越中守護）・仁木氏（伊賀守護）小笠原氏・石橋氏の五家と、細川氏の庶流家（典厩）及び有力被官（薬師寺・額田・若槻）がある。上杉本は將軍邸と細川氏関係以外では伊勢氏のみで、畠山邸跡は遊廓となり、武衛は斯波氏邸ではなく將軍家の別邸である。以上から三点とも武家屋敷の配置は細川氏を中心としたものであり、三管四職という幕府盛期の重職邸はなく、管領・侍所

の権限と機能を細川氏が吸収し、特に政元による將軍廢立と幕府機關の統制以後の細川惣領家の専制支配（京兆専制）の時代を表現する。この体制は永正五年（一五〇八）〜大永七年（一五二七）の高国政権、天文元年（一五三二）〜天文十八年（一五四九）晴元政権である。その後は三好長慶の時代となる。今谷氏は、歴博甲本・東博模本・上杉本を当時の支配体制を的確に代表し得る邸宅を選んで描いたとする。

上杉本の公方邸は將軍義晴が天文八年（一五三九）から十一年（一五三九）にかけて再建した今出川御所で花の御所の故地に造営された（大永五年（一五二五）の上京柳原御所は荒廢したと推定される）。この室町邸について今谷氏は、天文八年閏六月一日の「大館常興日記」から、御座敷へ通る御庭を鑄板塀で囲う記事があり、上杉本の公方邸庭園にそれが描かれているのを指摘した（歴博甲本の公方邸の庭園部は土塀で囲まれている）。この今出川御所は天文十五年（一五四六）將軍が義輝になつてからも使用され、天文廿一年（一五五二）までの存続は確認できるところが天文廿二年（一五五三）三月、將軍義輝と三好長慶の和議が破れ、義輝は近江朽木谷に五年間幽居することになるが、永祿元年（一五五八）、義輝と長慶が再度和睦して將軍が上洛した際は、まず二条本覺寺に入り、永祿二年（一五五九）八月より武衛陣の地に新邸の造営をはじめた。従つて上杉本の公方邸は天文十一年四月から天文廿二年三月に互るものとする。

細川邸は永正九年四月の「細川殿御飭」や天文七年（一五三八）の「天文十七年細川亭御成記」の検討から、澄元・高国・晴元・氏綱の邸宅は同一で「小川ノ屋形」である。天文十七年の御成記は実は天文七年の記

録であるとされるが、翌天文八年には將軍邸や伊勢氏邸も相次いで新築に着手した。天文七年の細川邸は同廿一年（二五五二）、細川家督についた氏綱が入居した頃までは存続したが、天文廿二年（二五五三）閏正月にはすでに氏綱は長慶によって淀城に移されている。細川邸の北隣の典厩邸も、高国Ⅱ伊賢、晴元Ⅱ晴賢、氏綱Ⅱ藤賢の組合せで当主が移るが、邸宅も細川邸と同じ運命をたどったと考える。

今谷氏は公方邸の年代から烏丸今出川東北隅の伊勢守邸の当主は、天文四年（二五三三）十一月、父貞忠の跡をついで政所執事となった貞孝とし、兵庫助から天文六年正月には伊勢守を称しており、蜷川親俊の日記から天文八年二月に將軍邸と同時に造営に着手し十一月に移徙している。天文十八年（二五四九）六月の晴元政権崩壊後も在京し、永祿五年（二五六二）三月、おそらく長慶によって執事を罷免され、九月松永久秀に攻め殺された。畠山図子については、今出川の室町と新町の中間を北上する小路で、東博模本には畠山殿として種長（河内守護）の居館が描かれている。ところが天文十四年（二五四五）五月、種長はこの邸で没し、実子がなかったため家督空位がつづいたが、結局守護代遊佐長教の支持する種長の弟政国に決った。その政国は河内高屋城にあった。今谷氏は遊佐長教が天文十五年（二五四六）夏、晴元に叛して氏綱を擁立しようとして討伐の対象となったのが畠山邸破却の原因と考える。和泉守護殿は細川播磨守元常とし、和泉は半国守護制で上守護と下守護が置かれたが、天文以降は一人制となった。元常は上守護系で、誓願寺東方のこの邸は上守護邸とする（下守護邸は綾小路万里小路）。元常は天文十八年（二五四九）の晴元政権崩壊とともに洛中を退去、和泉は長慶に

奪われ、長慶の弟十河一存が岸和田城に入った。薬師寺備後邸について、薬師寺氏は細川氏の根本被官で摂津守護代をつとめ、薬師寺元一、弟長忠、国長、みな備後守である。国長は天文二年六月に戦死し、上杉本の薬師寺邸の当主は元房と考えられ、摂津上郡の地域を管轄し、芥川城にあった。与一から備後守になったのは天文十六年五月以降で、天文十八年六月の晴元政権没落後は薬師寺氏は殆んど消滅する。三好筑前邸は、室町と新町の間の寺の内辺にあたるが、この邸の当主は長慶かその子義興かという問題がある（高橋氏は義興説）。今谷氏は長慶邸と考えるが、その理由は、(1)義興の筑前守任官は永祿三年（二五六〇）（長慶は修理大夫）だが、この時は既に將軍邸は武衛陣に移っている（永祿二年八月着工—十二月完成）(2)永祿三年に細川氏綱は淀城にあり、細川邸は京中に存在しない。(3)長慶の極盛期にその邸宅が薬師寺邸などと同じクラスに描かれる筈がない。(4)天文廿二年（二五五三）閏正月一月の言継卿記の新年の賀の回礼の道筋から考えて、三好長慶の邸宅が室町殿の近所にあった（室町寺之内）。(5)薬師寺元房邸とこの三好邸は上杉本では同等の邸宅であり、元房（摂津東半の守護代）、長慶（摂津西半守護代、越水城主）の地位に対応する。(6)長慶の筑前守任官は天文十七年（一五四八）は確実である（上限は天文十六年五月）。高島甚九郎邸（近衛邸の西南）について、この主は山城守護晴元の山城郡代・甚九郎長直と考える。長直の上司山城守護代木澤長政は天文十一年（一五四二）三月戦死し、その後置かれていない。長直は天文十八年（二五四九）六月の晴元政権崩壊の江口合戦で戦死している。松永正邸について、守護代の邸より一まわり小ぶり、高島甚九郎邸とほぼ同じ大きさである。松永

久秀は木沢長政敗死と前後して抬頭した長慶の最有力被官であり、天文十八年（一五四九）、言繼卿記に松永弾正忠とあり、同天文廿一年（一五五二）三月廿八日条の参礼順序は義輝室町殿——氏綱細川殿——三好筑前（長慶）——瑶林庵——松永弾正忠（久秀）とある。久秀は天文廿二年（一五五三）、摂津西半国を預けられ（滝山城主）、永禄三年（一五六〇）弾正忠から弾正少弼となる。

西院（小泉）城について。義晴・義輝父子の築いた城は勝軍地藏山城（天文十五年—十六年）・中尾城（天文十八年—十九年）・北白川城（天文十九年四月）・靈山城（天文廿一—廿二年）があるが、上杉本の北白川の里には城郭らしきものがない。西院城を描いて義晴築城の諸城を描かないということは考えられず、上杉本の上下限は、天文十五年十一月以前か、天文十六年七月—天文十八年十月、つまり三城のない時期と考えられる。今谷氏は天文末—永禄初年は火器の使用に対応して城郭建築が急速に発達した時期なので、上杉本の西院城は石垣や瓦が使用されず、それ以前のものではないかという。

以上、今谷氏は政権擔当者に注目して、義輝・晴元時代、勝軍地藏山城の炎上から江口合戦まで、天文十六年七月十九日から天文十八年六月廿四日までの間の情景を描いたのが上杉本とする。次いで今谷氏は寺社や公卿の建築、その他の景観も重ね合わせて考察し、天文十六年（一五四七）七月十九日から閏七月五日までの十六日間、あるいは上限を天文十六年五月まで遡って三ヶ月間の景観とする。

相国寺については応仁の乱でやけた後、文明十年（一四七八）仮佛殿・仮法堂が建てられたが、天文二十年（一五五二）七月、近江逃亡中の義

輝・晴元方と三好長慶方との戦斗でやけ、天正十一年（一五八三）まで本格的な復興はなく、上杉本は天文兵火以前の景観を描くとする。南禅寺も応仁の兵火で焼けた後、文明十一年（一四七九）法堂の再建がはじめられ、長享三年（一四八九）には山門に着手した。永正年間の「都聞寮覚書」からみて佛殿・方丈も存在したことになるが、上杉本では南禅寺の堂舎が椀皮葺に描かれ、五山のうちで椀皮葺に描かれているのは南禅寺だけで、仮造営の伽藍を示しているとする。また、天文三年（一五三四）九月義晴が入京した際には、南禅寺を仮の居館としている。建仁寺も応仁の兵火でやけ、長享二年（一四八八）、山門・僧堂・開山塔・経藏を再興したが、天文二十一年（一五五二）義輝の靈山城を晴元殘党が攻撃した際、焼失した。上杉本はこの山門・僧堂・方丈を描くとする。その後の復興は天正の安国寺恵瓊によるものである。応仁の兵火をまぬがれた東福寺については、現在の山門と禅堂を含めて正確に描いている。等持寺は二条——三条坊門、万里小路——高倉間にあり、曇華院の東方に描かれている。曇華院は高倉——東洞院、姉小路——三条間にあり、明応二年（一四九三）、大永七年（一五二七）にやけ、長らく半壊状態であった。天文二十二年（一五五八）正月、皇女聖秀尼入寺のために佛殿が再興された。上杉本では金雲で覆われて屋根の一部しか見えず、荒廢した時期の情景を示している。等持寺も延徳二年（一四九〇）三月に佛殿の立柱があったが、「仮佛殿」と呼ばれ、上杉本では椀皮葺にあらわされている。等持寺は天文末年まではこの位置にあったことは確実であるとする。慈照寺は、長享三年（一四八九）観音殿上棟当時、常御所・西指庵・超然亭・浴室・東求堂・会所・泉殿があったが、天文十六

年(一五四七)四月、義晴の中尾城を三好政長と四国衆が攻撃した時かなり破壊された。天文十九年(一五五〇)五月、義晴の葬儀がこゝで行われ、銀閣・東求堂のほか、常御所・会所があった。その後、天文十九年十一月に中尾城が破却された時に、銀閣と東求堂のみ残ることになったとする。

天文法華の乱でやけた法華寺院のうち、本圀寺は天文十六年五月に竣功、本能寺は六角―四条坊門、櫛笥―東大宮から天文十四年に三条―蛤薬師、油小路―西洞院に移って再建され、妙覚寺は天文十六年(一五四七)六月再建され、永祿元年(一五五八)末、義輝の仮御所となるが、上杉本には將軍御座所の様子はみえない。妙顕寺も二条堀河から永正十八年(一五二二)―二条西洞院南に移転し(西洞院―油小路、二条―三条坊門)天文十六年(一五四七)までに再興は終っている。頂妙寺は「親後日記」から土御門西洞院西類に天文十九年十一月以後再建という説もあるが、天文十六年六月と考える(頂妙寺に関して高橋氏の説と相違がみられる)。ほうまん寺は近衛殿南方の本満寺ではなく、革堂門前の小川を隔てた東側の寺であると考へる。

東寺の塔は永祿六年(一五六三)四月二日に焼失して、文祿三年(一五九四)の秀吉の再建まで存在しなかった。文明十八年(一四八六)九月の土一揆のため金堂・講堂・鐘楼・経蔵・鎮守八幡宮・中門・南大門がやけ、五重塔と灌頂堂のみ残った。このうち講堂は明応二年(一四九三)に再建され、解体・修理を経て現在に至っている。上杉本はこの講堂を描いている。泉涌寺は、文龜元年(一五〇二)禁裏の黒戸御所を移して佛殿兼法堂とし、享祿四年(一五三二)大内義隆の援助で舍利殿を

修復した。清水寺は文明十六年(一四八四)六月竣功の本堂を描くが、舞台左右の楽屋の屋根について、歴博甲本と清水寺参詣曼荼羅が入母屋に描くのに対して、上杉本・歴博乙本・東博模本は切妻に描く。これは天文元年(一五三二)五月の落雷で破損したのを天文十四年(一五四五)十一月までに再興したものである。六波羅密寺の屋根の寄棟は慶長の修造以前の形式である。戒光寺は諸堂舎を他寺に転売したが、天文十七年(一五四八)四月には総門と法堂しか残って居らず、上杉本はこれを描く。長講堂は大永七年(一五二七)末、細川高国と晴元との合戦で荒廃し、天文三年から五年にかけて再興された。眞如堂は文明十六年(一四八四)六月東山に移り、文龜三年(一五〇三)堂宇上棟、大永元年(一五二二)完成した。鞍馬寺は天文二十年(一五五一)三月、三好長慶と晴元の合戦でやけ、元和元年まで廢墟であった。神護寺について、天文十六年(一五四七)河内守護代遊佐長教らに擁立された細川氏綱の与党国慶が近くに城を築き、これを攻撃した晴元の兵火によって焼亡した。上杉本の下限は天文十六年閏七月の神護寺焼亡であるとす。引接寺千本閻魔堂は、天文五年にやけ、天文八年(一五三九)末に再建された。大覚寺は大永八年(一五二八)七月柳本賢治の軍によって破壊され、享祿五年(一五三二)には境内地主要部は嵯峨の豪商吉田家に譲渡された。経王堂は大永七年(一五二七)初めの細川尹賢と柳本賢治の合戦の頃から荒廃し、天文十四年(一五四五)十月ごろ復興された。廬山寺は永正十七年(一五二〇)に焼失し、大永六年(一五二六)八月頃から再興にかかり、永祿十二年(一五六九)まで存在する。仁和寺は応仁の乱で全く廢虚となり、法灯は双ヶ丘の南の小庵に維持された。上杉本はこの小庵を描く。

時宗寺院では正法寺が享祿三年（一五三〇）正月にやけ、天文二十二年（一五五三）八月靈山城炎上の時までに再度焼失したと思われる。新善光寺は大永七年（一五二七）の高国と晴天の戦斗で炎上し左女牛町から五条町北西類に移ったが天文七年（一五三八）十月再度兵火にかかり、再度五条の南、室町と新町間に移ったのが上杉本に描かれている。歎喜光寺（六条道場）は大永七年（一五二七）、高国と晴天の合戦で荒廃し、間もなく再興されたが、天文二十一年（一五五二）八月の兵火で焼失、のち高辻烏丸に移る。金蓮寺（四条道場）の四脚門は延暦寺の圧力で撤却し、天文十五年（一五四二）十一月再興された。西興寺（式阿弥道場）は天文十七年（一五四八）十一月瓦葺にしたが、上杉本はこれ以前の板葺の状態を示す。浄土宗関係の寺院では、知恩院は応仁の兵火で焼け、永正十四年（一五一七）八月に復興堂舎が焼け、同年末、万寿寺の一堂を買い取って阿弥陀堂とし、享祿三年（一五三〇）、御影堂を新築した。総門は天文六年（一五三七）末に竣工している。上杉本はこれらの堂舎を描いている。金戒光明寺は永正十一年（一五一四）三月本堂が落成した。報恩寺も文亀元年（一五〇二）再建された。清浄華院（上けい寺）も永正に本堂が再建され、清涼寺は永正間に本堂が再建され、天文八年（一五三九）には造営が一段落した。誓願寺は天文法華の乱にやけ、天文六年早速復興に着手したが門前の小川の上の暗渠在家を立ち除かせようとして勤修寺家から御教書が発給された。上杉本の門前の描写では暗渠在家はなくなっている。又鐘樓の鐘は天文十四年（一五四五）三月に鑄造された。十念寺は誓願寺内にあって、天文法華の乱で共に焼失した。再興に際し、小川通りに面して誓願寺に並んで建立することを望んだが、

幕府の説得をうけて誓願寺の後方となった。知恩寺（百万遍）も応仁の兵火、永正五年（一五〇八）の兵乱、天文法華の乱に炎上したが、天文間に再興し、永祿八年（一五六五）ルイス・フロイスがその殷賑ぶりを伝えたが、永祿九年（一五六六）八月に焼失した。佛陀寺も永正四年の兵火に罹り、土御門西洞院から一条烏丸に移って永正中に再建された。

神社について。祇園社は明応造替の社殿を描く。多宝塔は応仁元年（一四六七）から天正末年まで存在しない。四条大路の鴨川西岸の大鳥居は天文十三年（一五四四）七月の大洪水で流失しその後は再建されていない。上杉本には描かれていないが歴博甲本と東博模本には描かれている。吉田社の大元宮の八角円堂を描いている。北野社は延徳二年（一四九〇）の火災後の復興社殿を描き、松尾社は天文十一年（一五四二）の現在殿と仮殿を並べて描き、古式に則っている。

公卿のその他。内裏は康正二年（一四五六）竣功のもの。上杉本に描かれている月華門は天文十五年三月―十七年（一五四八）正月の間である。上杉本に描かれた公家は外記中原氏を除きいずれも現任の公卿ばかりである。甘露寺家も天文十七年（一五四八）十二月、前大納言兼按察使伊長の歿する以前を描いているであろう。

今谷氏は信長が描かせるとしたら、勘解小路二条の將軍義昭の新築を中心に置き、木下秀吉・明智光秀・村井貞勝ら信長の京都代官の邸宅を綺羅星のように並ぶ洛中洛外図でなければならぬとする。

歴博甲本の上京隻は、南北の通りを東から室町・新町・小川、東西の通りを北から上御霊前通・寺の内・上立売・北小路（今出川）・誓願寺門前通・一条を描き、東西行は右下から左上への順勝手の斜線であらわされる。従つて東南に視点をおいて西北を眺めた光景である。上御霊前通りは大徳寺に、寺の内は七の社に、上立売は北野松原と、やや北に振つてはいるか、その行手の位置関係は無理がない。この上京隻で最も注意を引くのが細川邸・典厩邸・公方邸の位置関係である。細川邸は小川が上立売通から南へ折れて流れる地点の北側にあり、その北に典厩邸が隣接する。この細川邸は「小川ノ屋形」として澄元・高国・晴元・氏綱の使用した邸宅だという。典厩邸の北、寺の内通を隔てて公方邸がある。その西側は、細川邸・典厩邸と並んで小川通りに面している。北は上御霊前の通りで限られている。公方邸は今の表千家・裏千家のある場所で、北は禅昌院のあったところにあたる。これは義尚・日野富子の小川殿の場所ではないか。寺の内と新町の交叉する北側に大心院が描かれているから、勿論細川政元が殺された永正四年（一五〇七）六月廿三日以後の情景で、細川邸の主は大内義興の援助で管領となつた高国であろう。政元の葬礼は澄元と政賢によつて行われたが、澄元は阿波から上洛した澄元に敗北して遊初軒で自殺した。遊初軒は政元が蔭涼軒を相国寺鹿苑院から將軍邸でもある自邸の近くに移動した場所である。澄元は大心院の北方の岩栖院に入った。永正五年（一五〇八）四月九日、高国が上洛し、

六月八日には大内義興と共に前將軍義種（義材）が入洛し、將軍義澄と澄元は近江に逃れ、義種が七月一日に將軍に復帰した。義澄は政元邸すなわち大心院を公方邸として政元と共用してきたが、義種は一条室町の吉良邸に入つてここを御所とした。吉良邸は永正十二年（一五一五）末に三条御所（下御所）に義種が移徙するまで、足かけ八年間に互つて將軍邸であつた。義種は永正十年（一五一一）七月五日に三条御所造管に着手したが、それは延徳二年に將軍になつた時、通玄寺を御所とした事を受けており、吉良邸にも三条殿の故御所を移している。通玄寺は將軍義詮夫人の母の創建にかかる尼五山の一つで、この頃には曇華院と称し、姉小路南・三条北・高倉西・東洞院東に位置した。義種は永正十二年（一五一五）十二月二日に三条御所に移徙したが、ここは義詮の三条坊門邸跡（三条坊門南・姉小路北・万里小路東・富小路西）とも考えられるが、宣胤卿記に三条万里小路御亭といい、永正十四年に成つた宗長の「宇津山記」には、「公方様三条の昔の跡あらためつくりみがかせ給ひて」とあり「元三以後の出仕等持寺門前通玄寺殿の左右、輿をならべ馬をひかへ、三条坊門、東洞院、三条河原まで、男女の物見雲霞のやうにみな人かたりし」とあるので、曇華院の東に隣接する地とも考えられる。いづれにしても足利氏の菩提寺で旧尊氏邸でもある等持寺（二条南・三条坊門北・高倉東・万里小路西）に近く、いわゆる下御所の地である。義種は大永元年（一五二二）三月七日、高国と不和になり阿波に下るまでここに住んだ。一方、前將軍義澄は近江で没したが、その子義晴が大永元年七月六日に上洛して岩栖院に入り、十二月廿四日三条御所で元服し、廿五日將軍となつた。十一月廿八日に高国は管領に任じられている。岩

栖院は大永五年（一五二五）まで公方邸であった。大永五年八月三日に新御所の立柱が行われたが、この新御所は上御所で、下御所即ち三条御所を移建して完成し、十二月十三日、義晴は岩栖院から移徙した。これがいわゆる柳原御所であり、香川以下四五人の旧蹟であるが、歴博甲本の公方邸とは位置が異なる。これについては次の様に考えてみたい。歴博甲本の細川邸の主は高国、典厩は尹賢で、いわば高国時代を理想化して描くために、由緒のある小川殿のところ公方邸をもってきたのである。高国の前の管領政元は、専横でかつ奇行多く、公家も武家も対応に困惑していた。高国は大内義興の力を借りてやっと細川惣領家を嗣ぎ、永正十五年（一五一八）、義興が周防に帰国するとその政権は忽ち弱体化するという有様であったが、人物は穩和で一つの時代を代表させるに相応しい人物と見做されたのではなからうか。例えば大永三年、三條家と細川被官との間で境界論争があったとき、高国の配慮で事なきを得たが、そのことについて鷲尾隆康は「凡そ公家の儀は薄氷を踏むが如し。慎むべし。右京大夫（高国）毎日穩便之儀、尤も大切の事也。感ず可し」といつている（「二水記」六月廿六日）。また享祿四年（一五三二）六月四日、天王寺の合戦で阿波衆に敗れた高国は、尼崎の京屋に忍んで居るところを捉えられ、八日に大物の広徳寺で切腹したが、ここでも鷲尾隆康は、今度の高国の考えもただ寺社本所領を回復しようとの大願のみで、末世の武士の心中としては誠に以て有難き事とし、神明佛陀の冥助を得られずして運命の盡きたことは、公家門跡の断絶の基になるのではないかといつて、四十八才の死を惜んでいる。高国は辞世の歌を方々へ遺すよう依頼して死んだが、「足利季世紀」にも「弓馬ノ礼法ヲ糺サレ、萬

絶タル跡ヲ興シ、スタレタル道ヲ尋玉ヒ、和歌ノ奥儀ヲ知り玉ヘバ、公家武家トモニ惜ミ申ス。中ニモ慈悲深シテ物ニ感ジ、上下ヲキラハズ賞翫アル事多シ」とある。連歌師宗長も「ことにふれ折につけたるねんごろの御ことのみ、老ののちのおもひ出、筆かぎりあればつくしがたし」といつている。因みに高国とコンビを組んだ將軍義隆についても、天文頃の「塵塚物語」が、正直で慈悲深い人物であったことを伝えている。高国によって代表される一つの時代とは、結局、中世的な武家の典故儀礼を重んずる時代であり、それは又、伊勢貞宗・貞陸を中心とする伊勢氏一統による武家儀礼の集大成の時代である。

歴博甲本の公方邸の西側、小川通の寺の内と上御霊前通りの間の西側に、宝鏡寺と南御所が南北に並んでいる。宝鏡寺には將軍義澄の妹が入寺し、南御所は日野富子の一人娘が住持である。宝鏡寺については、小川に架る板橋を渡つて椴皮葺の棟門を入ると板葺入母屋造の庫裡があり、その裏庭で尼僧が洗張りをしている。門を入れて左手南側に塀中門があり、東向きの本堂の前庭に通じる。本堂は縁を廻らして中央やや北寄りに軒唐破風つきの妻戸を備え、書院造の車寄風の正面をもつ椴皮葺の入母屋造建物である。その背後にもう一棟椴皮葺の堂があり、この二つの建物が葺戸と障子なのか、舞良戸と障子なのか判然としない。そして東南隅の土塀の交叉する角に二階屋で板葺の櫓状の建物がある。これは応仁の乱後、諸寺院に設けられた物見櫓の名残かも知れない。北隣の南御所も宝鏡寺と全く同一の構成で、ただ門が板葺なのと、物見櫓風の建物がないだけである。いずれにしても宝鏡寺と南御所は同形式・同規模・同格の寺として表わされ、しかも本堂は書院造風あるいは主殿風の外觀

を備えている。

この宝鏡寺について、他の諸本について検討する。まず東博模本について、典厩邸の北寺の内通りを隔てて描かれていた公方邸はなく、宝鏡寺と南御所が南北に並ぶが、南御所は本堂のみがしっかりと描かれている。この本堂は歴博甲本と同じく両寺とも全く同じ形式・規模のもので、東博模本の場合は板葺きの入母屋造りで、周りに縁を廻らし、堂の東面南寄りに軒唐破風つきの妻戸を付け、葺戸と御簾を入れる。宝鏡寺の場合、土塀が巡り、板葺の棟門を入ると正面に土塀に圍れた庫裡があり、切妻造板葺である。門を入れて左側すなわち南側に塀中門があり、本堂の前庭に出る。東西隅の土塀の交叉する角に二階屋切妻の櫓風の建物がある。本堂と庫裡のうしろに、棟の方向が南北の板葺の建物が見える。寺地の南側は木立に覆われ、東北隅には小山が築かれ大木があり、その下に祠がある。恐らく寺の鎮守であろう。土塀を隔てて北隣の南御所の本堂は宝鏡寺の本堂と全く同じで、東西柱間五間のうち、南から二間目に軒唐破風つきの妻戸を備え、他の四間分は葺戸である。そして本堂の背後にもう一棟板葺の建物が見える。歴博甲本と比べると、本堂の方向が異なり、歴博甲本では平入り、東博模本では妻入りとなり、東博模本の方がより主殿造・書院造に近い。隅の櫓状の建物についても、東博模本では屋根も二層になっており、二階部分の窓状の開口部もより櫓らしく見える。東博模本では宝鏡寺・南御所の西側に油小路がはっきり描かれ、寺の内の行く先に、大徳寺興臨院（天文二年創建）を描く。

歴博乙本について。ここでは周囲の状況が大幅に変わっている。まず細川邸の北の典厩邸がなくなり、そこから寺の内通りの北にかけての広

大な場所で調馬が行われており、その北端の建物に一人の武士が二人の小姓を侍らせて坐す。この地点について、寺の内通りが通っているようには見えない。但し宝鏡寺南側の寺の内通の行先は七の社である。宝鏡寺は土塀にかこまれ、板葺の棟門を入るとやや左前方に板葺入母屋造の建物が棟を東西方向に向けて描かれ、葺戸がつけられている。しかし歴博甲本や東博模本にみられた軒唐破風つきの妻戸や、塀中門はみられない。唯、東南角の櫓状の建物は切妻造板葺に描かれ、屋根は二層である。歴博乙本では、歴博甲本や東博模本に見られた描写への情熱が感じられない。北隣の南御所は全く消滅して、土塀のあった所に青竹の垣を結って、その背後に竹藪が生い茂っている。かつて棟門のあった辺の垣根が途切れて、荷を擔いだ人物が入って行く。歴博乙本のこの部分を見ただけでも、細川惣領家・庶流家による武家社会の支配が終り、日野富子の娘大慈院も没して、前述の高国の時代は一変したことがわかる。上杉本では、上立売と寺の内の間に細川邸と典厩邸を描くが、寺の内通はきちんと通っていない。しかし寺の内から北方へ、小川に添って宝鏡寺と南御所を描き、更に北隣にやうたい院を描き加える。これと平行して、典厩の北側には禅昌院をつけ加える。このやうたい院と禅昌院を結ぶ線が上御霊前通りにあたる。宝鏡寺は、土塀にかこまれ、板葺きの棟門を入ると、右手東北角に鎮守があり、大木が茂る。これは東博模本と共通する。左手南側に板葺き入母屋造の本堂があり、その妻側、すなわち東面は柱間五間ないし四間で、南側から二間目あるいは南端の柱間を両開きの妻戸とし、軒唐破風を掲げる。他の柱間には葺戸と御簾を配する。本堂の斜め後方に白壁の塀に圍まれた板葺で切妻造と思われる建物がある。一棟あ

る。東南隅の土塀の交叉する角にある櫓風の二階屋も描かれ、棟の方向が南北である点や窓風の開口部、屋根が二重である点など、東博模本によく似ている。南御所では、本殿一棟のみを描くが、これは宝鏡寺本堂と殆んど同じ形式・規模で、棟の方向は東西つまり妻入りで、その東面の南寄りに軒唐破風付の両開き妻戸をつける。この本堂の描写も東博模本に近い。南御所では棟門辺りは金雲に覆われているが、宝鏡寺ともども東博模本に描かれた塀中門が存在する建物の配置を示す。以上を要約すると、東博模本と上杉本とは、建物の形式や配置が酷似し、歴博甲本は上記二本と建物の配置がやや似るが、本堂の棟が南北向きである点や、屋根が桧皮葺である点が異なり、宝鏡寺の櫓状建物の形式も異なり、鎮守社は描かれていない。歴博乙本は上記三本とは全く異なり、宝鏡寺や南御所そのものへの関心が稀薄であると思われる。

上京隻には二階屋の町屋が二―三箇所描かれているが、それらについて諸本の関係を見よう。まず歴博甲本では、上立売新町東入ルの北側二軒目の町屋で帯屋ではないかと思われる。もう一つは、上立売室町上ルの西側三軒目で、これは鍵屋である。東博模本では上立売新町東入ル北側の二階屋が描かれており、歴博甲本より卯建の描写が明確で、庇は歴博甲本が一階部分全体に付けているのに、東博模本では暖簾のかかった入口の上部にのみ限られる。しかし東博模本からは何の商売をしているかは判然としない。東博模本のもう一例は、小川通の水落地蔵前を少し南へ下った小川の上に、小川を跨いで建てられたいわゆる暗渠町屋の二階屋でこれは扇屋である。歴博乙本については、小川通の水落地蔵前を少し北に上ったところに暗渠町屋の二階屋があり、これも扇屋である。

規模は東博模本の扇屋と同じ位であるが、歴博乙本の方が卯建などの描写がこまかい。また、東博模本では三軒並んだ町屋の真中であるが、歴博乙本では二軒並んだ下手の方である。上立売新町東入ルの辺りは、歴博乙本では雲にかくれて見えない。因みに歴博甲本の小川通、水落地蔵前を少し下ったところに、暗渠町屋で平屋の扇屋が描かれている。以上二階屋はいずれも上京隻にのみ見られたのであるが、上杉本には上京隻には二階屋は見られず、下京隻に二ヶ所ある。一つは四条坊門室町の東南角で、漆器屋らしく見え、もう一つは綾小路室町の東南角でかなり大きな家だが、家業は不明である。上杉本は下京隻の中心、四条室町辺に二階屋を二つ配置したことになる。上京の二階屋については、小川の扇屋が東博模本と歴博乙本に描かれ、上立売新町の二階屋が歴博甲本と東博模本に描かれたことになる。町屋は公家武家の邸宅や社寺と異なってそう永続性のあるものでもないであろうから、これら三本はあまり年代の距たるものでもなからう。上杉本については、上京の二階屋への関心のなさが指摘できるかも知れない。

洛中洛外図はまず地理的リアリティがあるべきであろう。それを乱すものがあるとすれば、画家（あるいは注文主）の特別な建物や事象に対する思い入れであろう。その思い入れの強さは地理的リアリティを凌ぐリアリティを生み出すことも予想される。以下、四点の屏風について比較検討を続行し何がしかの結論を得ようとするものである。（未完）

（本稿は平成四年度の学部共同研究費による研究成果である）